

第17回

積丹ソラン 味覚祭り



6月28日、第11回目を迎える「積丹ソラン味覚祭り」が開催され町内外から訪れた約1万8千人が積丹町自慢の食や迫力のステージを楽しみました。

今年はいにくの悪天候の中での開催となりましたが、積丹自慢の鮮魚や鮮魚加工品、例年即売となる恒例のジャンボ浜鍋、姉妹都市高知県香美市からの鰹のたたきや香り高いゆず製品などを求めて各テント前には

行列が作られ、この「食の祭典」への来場者の高い期待が見られました。

一方、ステージでは、YOS AKOソランの名門「平岸天神」「北海道大学 縁」による完成された演舞や、プロ歌手小野寺正幸氏による本物の「歌」、ジャグリング等のパフォーマンスショー、町の伝統芸能「正調鯉場音頭」等が会場を沸かせたほか、美国中学校吹奏楽部による演奏には父母からの熱い声援が飛んでいました。また、毎年恒例の「豊漁豊作餅まき」や、おなじみとなった4回目を数える「ウニ剥きコンテスト」などの他、今回初の試み「町内カラオケ歌うま自慢」では10人の町民が自慢の美声を披露し、場内から温かい拍手が送られました。

最後には打ち上げ花火が夜空を鮮やかに彩り、盛況となった初夏の祭典の終わりを告げました。

また、会場に隣接した美国漁港では、B&G財団やウォーターセーフティニッポンなど関係団体の協力で「水の事故ゼロ運動」が実施され、参加者は水難事故への対処法を学びました。

25年の交流



今年も町内各地区で開催され、地域住民やこの日のために帰省した方々で賑わいをみせた例大祭、7月16日～18日に実施された**神威神社の祭典**を訪れると、威勢の良い掛け声や歓声の中に、漁村の伝統文化を地域と共に守る北海道大学の学生とそのOBの姿がありました。半島先端の地と大学生らを四半世紀にわたって結ぶ「縁」を紹介します。

なぜ半島先端の地に？

この長い交流のきっかけは平成3年にさかのぼります。当時、余別地区・余別川流域エリアではコープさっぽろと町が協力し、「森と水と人との交わり」

をテーマとした「ふれあいの森」の開設に向けての取組が進められており、その基本計画・設計を担ったのが北海道大学院工学部小林英嗣教授とその研究室に所属する学生達でした。その後、

余別小学校と余別地区コミュニティセンターの改築計画づくりにつながりました。

そして、小林教授がかねてより学生たちに伝えていた「計画や設計を行うだけではなく、地域との交流を長く大切にし、信頼感をもってもらうことが大切」という思想に生徒たちが呼応し、神威神社祭典への協力を行ったことからこの交流が始まりました。

交流の襷を繋ぐ

それ以降、例大祭での金魚すくいや綿あめなどの出店、運動会への協力など、地域へのサ

ポートを目的とした学生とOBらによる交流が現在まで続いており、毎年約10人が例大祭に参加。人口減少が進む漁村集落の伝統文化の継承に果たす役割がますます大きくなっています。

平成22年3月に小林教授が退官しましたが、学生とOBは現在も先輩から後輩へと積丹ファンである恩師の熱い想いを受け継ぎ、また、仲間たちと地域の支援策について議論を深めながら途切れることの無い交流の襷を繋いでいます。

この日神輿を担いでいた北海道大学OBの渡部典大さん（29歳）は「25年間絶やさずに続けてきたことにとっても意義があると思います。先輩たちが築いた積み重ねのおかげで自分も都市では得られない貴重な経験をさせていただきました。関わり方はその時々の中で様々だと思いますが、この交流を次の世代にも繋いでいきたい。」と話し、また、東京在住時には祭典を訪れることが叶わなかったものの、東京で暮らすOBが集まった経験もあると話してくれました。